

「発信型」英語教科書を使用したプレゼンテーション課題による発信のための英語力向上の試み

森永弘司(同志社大学)

日本英語教育学会第44回年次研究集会

早稲田大学 2014/3/1.2

発表概要

1. はじめに
2. 今回の授業実践の目的と方法
3. 使用テキスト
4. 受講生と授業科目
5. レポート及びプレゼン課題
6. 受講者の出身地データ
7. アンケート調査
8. アンケート調査の結果とその考察
9. 二つのテストによる英語力増減の検証
10. まとめと今後の課題

1. はじめに

Reading, Listening重視の「受信型英語」からSpeaking, Writing重視の「発信型英語」へ.

TOEICにSpeaking及びWriting能力を測定するテストが開発され、従来の990点満点から今後はSとWを加えた1390点満点が英語能力測定の基準となって行くであろう. 従って大学の英語教育に於いても、Speech, presentation, discussionといった発信能力を伸ばす授業が増え、重視されることが予想される.

高校及び大学入試が依然としてReadingとListening能力の測定を重視しているために、ReadingやListeningの参考書は数多く出版されているのに比して、SpeakingやWritingの参考書は数が少なく、また自学自習も行い難い。

2. 今回の授業実践の目的と方法

学生にWritingとPresentationの課題を課すことで、学生の発信能力を高める事を目標とした。

学生の発信能力を高める意図で編集されたテキスト“My Home, My English Roots”を使用することで、大学の英語教員の手になるモデルを提示し、モデルを参考にして学生自らが自分の故郷紹介と現在までの英語との関わり記述させるよう指導した。

3. 使用テキスト

“My Home, My English Roots volume 1”、『日本の大学英語教師 15人のルーツ 1』

(監修者：斎藤兆史、松柏社、2013)

出身地を異にする15人の大学英語教員が自分の故郷と英語との関わりを記したエッセイ15編を収録している。

執筆者 出身地	表題	専攻	所属
佐々木真理 福井県 (福井市)	“The Door to the Foreign World beyond Fukui	アメリカ文学	実践女子大学
鳥飼玖美子 東京都 (赤坂)	“My initial encounter with English in Akasaka”	言語コミュニケー ション論、通訳翻訳 学、英語教育学	立教大学
堀正広 福岡県 (大牟田)	“Stick to Your Bush!”	英語学、文体論	熊本学園大学
竹内理 兵庫県 (西宮)	“A shortwave radio, a typewriter, and the Voice of America”	英語教育学、応用 言語学	関西大学
岩田美喜 宮城県 仙台	“Installed Out of Place But in Line”	イギリス文学、アイ ルランド文学	東北大学

板倉巖一郎 京都府 (京都市)	“Kyoto as Wonderland”	イギリス文学	中京大学
西原俊明 長崎県 (佐世保)	“Environment on Decision-making”	英語学、英語教育	長崎大学
北和文 富山県 (氷見)	“On the ‘wrong’ side”	外国語教育学 応用言語学	東京理科大学
大地真介 広島県 (広島市)	“Learning English in Hiroshima”	アメリカ文学	広島大学
上石実加子 北海道 (登別市)	“Visiting my past, to learn new things”	イギリス文学	北星学園大学

齋藤兆史 栃木県 (宇都宮市)	“Reading Bertrand Russell in Utsunomiya”	英学、言語教育	東京大学
橋本安央 大阪府 (枚方市)	“Away from Here to Somewhere”	アメリカ文学	関西学院大学
大串尚代 愛知県 (名古屋市)	“A Gateway to the Outside World”	アメリカ文学	慶應義塾大学
大西洋一 福島県 (喜多方市)	“Mining and Dancing in a Northern Town”	イギリス文学	秋田大学
山里勝己 沖縄県 (浦添市)	“A Paperboy on an American Military Base”	アメリカ文学	琉球大学

4. 受講生と授業科目

同志社大学1回生必修英語科目「アナリティカル・リーディング」の商学部と法学部の学生の総計72名.

「アナリティカル・リーディング」の授業目標は以下の通りである.

「現代社会における最も有力な国際語として英語が担う役割を踏まえ、英文の読解を通じて様々な分野の基礎的な背景・コンテクストを把握する能力を身につけさせる. 英文の構造、

とりわけパラグラフの概念を理解させる。パラグラフ・リーディングを中心に、英語特有の論理展開、発想法に基づいた読む力を養う(CEFR「読む力」B1レベルを目標とする)。さらに文章全体の要旨を英文でまとめるという作業を通じて、パラグラフ・ライティングの基礎を教える(CEFR「書く力」B1レベルを目標とする)。

CEFR「読む力」B1レベル

「非常によく使われる日常語や、自分の仕事関連の言葉で書かれたテキストなら理解できる。出来事、感情、希望が表現されている私信を理解できる。」

CEFR「書く力」B1レベル

身近で個人的に関心のある話題について、
つながりのあるテキストを書くことができる。
私信で経験や印象を書くことができる。

5. レポート及びプレゼン課題

レポート課題：“My hometown and brief history of learning English”

上記のタイトルで英文で10.5ポイント、シングル・スペースでA4きっちり1枚書きなさい。

プレゼン課題：

上記の課題をもとに3～4分間のプレゼンを英語でおこないなさい。

6. 受講者の出身地データ (N=72)

出身地	学生数
大阪	21
京都	12
兵庫	8
愛媛	5
滋賀	4
徳島	3
石川	2
埼玉	2
岡山	2

熊本	2
神奈川	1
愛知	1
福井	1
三重	1
和歌山	1
山口	1
香川	1
大分	1
鹿児島	1
中国	1
アメリカ	1

7. アンケート調査

レポート課題には別紙に次の質問にも答えることを義務づけた。

1. レポート課題の作成に際して役に立ったエッセイを記載しなさい。
2. 感銘を受けたエッセイを記載しなさい。また感銘を受けた理由についても簡潔に述べなさい。
(1, 2共に複数回答も可とした)

8. アンケート調査の結果

1. 執筆に際して役立ったエッセイ(上位5編)

執筆者 出身地	タイトル	学生数
竹内理 兵庫県	“A shortwave radio, a typewriter, and the Voice of America”	18
橋本安央 大阪府	“Away from Here to Somewhere”	16
板倉巖一郎 京都府	“Kyoto as Wonderland”	11
西原俊明 長崎県	“Environment on Decision-making”	10
北和文 富山県	“On the ‘wrong’ side”	10

2. 感銘を受けたエッセイ

執筆者 出身地	タイトル	学生数
板倉巖一郎 京都府	“Kyoto as Wonderland”	16
竹内理 兵庫県	“A shortwave radio, a typewriter, and the Voice of America”	11
山里勝己 沖縄県	“A Paperboy on an American Military Base”	9
鳥飼玖美子 東京都	“My initial encounter with English in Akasaka”	8
西原俊明 長崎県	“Environment on Decision-making”	8
橋本安央 大阪府	“Away from Here to Somewhere”	8

執筆に際して役立ったエッセイ

執筆に際して役立ったエッセイに関しては、上位の兵庫、大阪、京都は学生の出身地が反映されたものになっていると推察される。兵庫と長崎のエッセイは他の論文に比較して平易にかかれている点が参考になったと思われる。富山のエッセイは文章の展開の巧みさが学生にアピールしたと考えられる。

感銘を受けたエッセイ

感銘を受けたエッセイに関しては、地方から京都に出てきて学生生活を送っている学生の興味を上手くとらえた京都についてのエッセーが首位であった。またこのエッセーで語られているディスカッションを主体とする授業方法に共感を表明する学生も少なからずいた。

2位の兵庫に関するエッセーは、中学生の終わりまで英語が大嫌いだった執筆者が、短波ラジオとタイプライターとVOAの助けで英語嫌いを克服し、大学教授にまでなった点に感銘を受けたと記述

している学生が多くいた。

3位の沖縄に関するエッセーは、執筆者と米軍基地に住んでいた年配のアメリカ人婦人教師との心温まる交流が学生の琴線に触れたようである。

4位の東京についてのエッセーは、幼少期の執筆者が同じ年頃のアメリカ人の少女と必死になってコミュニケーションを取ろうとする姿に微笑ましさを感じた点が大きな要因になっている。

同じ4位の長崎について述べたエッセーでは、人生に浮き沈みは避けられないが、一生懸命努力をし続ければ必ず道は開けるという執筆者の熱いメッセージに対する感銘が綴られていた。

大阪に関するエッセーでは執筆者の音楽に寄せる思いが、音楽好きの学生の心を引きつけたようである。

9. 二つのテストによる英語力増減の検証 と考察

Vocabulary Levels Test, C-testの2種類のテストを使用して受講生の語彙力、全般的な英語力の増減を調査した。テストの信頼度を示すクロンバック α はVocabulary Levels Testの場合 $\alpha = .86$, C-testの場合 $.84$ であった。一般に $\alpha = .80$ 以上の数値は高い信頼度を示すといわれているので、両テスト共信頼度の高いテストといえる。Vocabulary Levels Testの満点は10,000語、C-testの満点は100点である。

上記2種類のテストを前期1回目の授業(4月初旬)と後期13及び14週目(1月初旬)の授業で実施した。

商学部の参加者のデータ

2つのテストの1回目と2回目の平均を示す。

Vocabulary Levels TestとC-testの参加者は共に36名であった。

	1回目	2回目
Vocabulary Levels Test	3,913	4,131 (+218)
C-test	40	49 (+9)

法学部の参加者のデータ

Vocabulary Levels Testの参加者は33名、C-testの参加者は35名であった。

	1回目	2回目
Vocabulary Levels Test	4,755	4,870 (+115)
C-test	48	57 (+9)

文学教材を使用したクラスのデータ

2012年度に通年で文学教材を使用して授業を行った2クラスのデータ. Vocabulary Levels Testの参加者は80名、C-testの参加者は79名であった.

	1回目	2回目
Vocabulary Levels Test	4,422	4,831 (+409)
C-test	40	41 (+1)

2013年度に通年で文学教材を使用して授業を行った2クラスのデータ. Vocabulary Levels Testの参加者は62名、C-testの参加者は60名であった.

	1回目	2回目
Vocabulary Levels Test	4,424	4,647 (+223)
C-test	59	64 (+5)

C-testと様々なテストとの相関係数

C-testとVocabulary Levels Test, Vocabulary Size Test, Word Associates Test, 文法力テスト, 読解力テスト, 聴解力テストとの間の相関係数

	VLT	VST	PLT	WAT	文法力	読解力	聴解力
1回目	.63	.61	.79	.66		.64	
	.61	.38	.55	.44			.69
2回目	.59		.63		.60	.57	
	.63		.60	.40	.61		.66
	.66		.68		.65		.78
平均	.62	.50	.65	.50	.62	.61	.71

C-testはcloze testの一種で、英語の総合力を推定するために開発されたテストである。私が行った数種類のテストとの相関係数が示しているように聴解力テストとの相関係数が最も強く、またproductive vocabulary(発表語彙)を測定するPLTや読解力テスト及びreceptive vocabulary(受容語彙)を測定するVLTとも強い相関性を示している。

ここで注目したいのは文学教材を使用したクラスのC-testの伸びが+1点と+5点であったのに対して、今回発信能力を伸ばす意図で作成されたテキストを使用し、英文のレポートと英語でのプレゼンを義務付けた2つのクラスの得点が+9点であった点である。この9点の伸びは聴解力やスピーキング力やライティング力の根幹をなす発表語彙の伸長を示すものであると解釈できる可能性がある。

10. まとめと今後の課題

C-testの9点の伸びが聴解力の向上や発表語彙の増加を直接示す証左になるものであれば、今回の授業の目論見はある程度達成されたと言えるであろう。しかしながら「達成された」と断言するには、次の2つの問題をクリアーする必要がある。

1. 発表語彙を測定するProductive Levels Testを実施しなかった.
2. 1回生のもう一つの英語必修科目の「コミュニケーション・イングリッシュ」の学習効果が増加した9点に反映されている可能性がある.

同じテキストを使用し、上記の2点をクリアーした授業実践を行いたいと思う.

参考文献

斎藤兆史・中村哲子(編注)(2009)『文学で学ぶ英語リーディング』 東京:研究社

斎藤兆史(監修)(2013) *My Home, My English Roots* Volume 1
東京:松柏社

薬袋善郎(編著)、森永弘司(企画・編集協力)(2009)『名文で
養う英語精読力』東京:研究社

Morinaga, K. (2009). Reliability of C-Test as a Device Measuring
Reading and Listening Comprehension Abilities. JACET 48th
Annual Convention.

Morinaga, K. (2013). "Consideration of the Literary Texts from the Three Viewpoints: Heightening Students' Motivations to Read, Enhancing their Cultures and Improving their English Proficiencies.

Read, Enhancing their Cultures and Improving their English Proficiencies" 4th Liberlit Conference

Nation, P. & Beglar, D. (2007). A vocabulary size test. *The Language Teacher*, 31(1), 9-13.

Read, J. (2000). *Assessing Vocabulary*. Cambridge: Cambridge University Press.

Yoshimura, T. (1999). Reliability of the C-Test. *Teaching Writing in Colleges and Universities: Practical Reports*, 3, 73-79.

ご清聴いただき有難うございます